
しょ～かん！ おと～さん！？

猫羊羹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しょくかん！ おとくさん！？

【Nコード】

N3041M

【作者名】

猫羊羹

【あらすじ】

これは、『彼』と『彼女』の物語。

ちいさな、ちいさな。

幸せの 物語。

ぶろろーぐ（前書き）

くはじめてましてのかた・はじめましてでないかたへく

皆々様こんにちは……『猫羊羹』と申します。

今まで何作品かオリジナル創作を書いて来ましたが、創作の技量向上のためにこの度、こちらでの初投稿へと踏み切る事にしました。未だ到らぬ身ではありますが、精一杯、楽しんで貰えるような作品を目指しますので、どうぞ宜しくお願いします。

そんな訳で注意事項です？

《そのいち》

本作品は、現代ファンタジー風ハートフルコメディとなっております。そのため、物語の壮大さや、派手なアクション・バトルなどを御所望の方には内容がそぐわない場合が多々あると思いますので、ご了承ください。

《そのに》

更新頻度に関しては、かなりランダムになってしまっていると思います。出来るだけ早く更新するようにしますので気が向いた時にでも読んでやって下さい。すごく、励みになります。

《そのさん》

当作品は、自サイト『猫物騙』内でも掲載されている連載作品です（内容は一緒です）より多くの意見をお聞きしたく、こちらで掲載する事にしました。そのため、お手数ですが感想、批評、ご意見、誤字報告等、頂けますと非常に嬉しく。また、有難く思います。

以上、未熟故に至らぬ点多々あるとは思いますが、しばしの間お付き合い頂ければ幸いです。

ぶろろーぐ

汝、滅びを欲するものなれば、我、この書に記し契約の陣を授けよう。

魔の頂の一角にして、幾千の魔人どもの恐るべき主。

彼の者に滅ばせぬ物はなし、彼の者に滅ばされぬ者はなし。

陣によって契られし者招きし時、必ずや汝の望みは成就されるであらう。

……されど、心せよ。彼の者が滅ぼすは万象一切尽く。

そう、彼の者こそ

ばかり……

本が、閉じられる。

閉じたのは一人の女性だった。

髪や肌、手の先に至るまで、透けてしまいそうにその身は白く、彼女が身に纏っている白地の衣服と相まって、ひどく儚げな印象を与えるものに与える。

「……ん」

女性がこくりと頷く。洩れた声はどこか満足そうだったが、それも無理ではなかった。

三十一時間五十四分二十六秒。

自宅の地下にある蔵書室に潜り。この本を見つけるまでに彼女が要した時間である。

……とはいえ、そこまで掛ってしまったのは何も彼女のせいではない。原因は蔵書室そのものにあった。

所詮は一軒家の蔵書室と侮るなかれ、様々な分野の書物は勿論のこと、彼女の先祖が代々受け継いできた『契約証明陣』の記された招喚の書の数に膨大の一言につき、このままでは本に家乗っ取られかねないと、あながち冗談ではない危機感を抱いた先々代の当主によって地下に増築した蔵書室の規模は、家よりも遙かに大きなものであり……

そんな、下手をすればそこいらの図書館よりも充実している蔵書室　彼女の祖父は冗談で『おてがる迷宮蔵書室』と呼んでいたで、途中、食事や睡眠などの休憩を挟んだものの、聞くだけでうんざりするような時間を彼女はひたすら一冊の本を探す事に費やしていたのだ。その苦労は察するに余りある。

だが、彼女はそれを見つけた。故に、全ては過去の苦勞話。

薄明りとカビ臭さに包まれた蔵書室から、彼女の足は出口へと……

かばそき埃達を宙に舞わせながら、彼女は祖父の言葉を思い返す。

『招喚の書が収められた棚以外の棚に、たった一冊だけある招喚の書を探しなさい。それがお前の力になってくれるだろう』

彼女が最も尊敬する祖父。偉大なるアンシエルリーナ家が当主。ゼラニウム・アンシエルリーナが自身へと授けてくれた言葉。

詳細は知らない。それが、如何、彼女の力になるのかさえ。

それでも、彼女に一切の疑心もない……当然だ。

だって 大切な家族を信じる事は、彼女にとって当たり前、当たり前なのだから。

蔵書室の出入り扉を通り、随分とごぶざだったやわらかな陽の空気を肌で感じながら、彼女の歩みは、階段へ、台所へ、階段へ。

そして……

「ふう」

一息吐く。地下から二階の自室へと一直線に、大判な百科事典程の書を抱えて来たのだ。体を動かす行為が苦手な彼女には、それが少しばかり堪えた。

部屋の中央で、書を落とすように置く。重い落下音が部屋を揺らした。

その音に、彼女はほんの少し力強さを感じる。

（大丈夫。きっと）

しばらくの間、書をめくる音だけが部屋を満たし……やがて、止まる。彼女の藍色の瞳には、ひび割れたスタンドグラスのような輪が映っていた。そして。

静かな、声が、風が、光が、部屋を、彼女を　染めた。

乱雑で、整然で、厳かで、陽気で、夜で、朝で、なんにだってとれて……そんな、約束の言葉が、小さな、世界を……！

そして、彼女は……唱えた。

「　招喚」

なにかが、始まった。

ぶろろーぐ（後書き）

あくまで、ハートフルコメディです……

第一話 ゾーきはらん 前編

『位界』と呼ばれる世界がある。

そこは、地球から遠くて近く。また、地球とは異なる理を以て世界が回っていた。

その理は人の生み出す混沌に比べれば至極分かりやすい。単純明快そのものと言っても良い。

『弱肉強食』。世界はただ、そんな一言に尽きた。

強者が大口を開けて笑い。弱者は肩身を寄せ合い咽び泣く……奪い奪われ、騙し騙され、殺し、殺される。

そこは、そんな混沌乱世のパラダイスだった。

だいたい、二百年くらい前までは。

今日も位界の風が吹く。

おどろおどろしい紫の空では、運送業を営む怪鳥やドラゴンが、人や物をのせて忙しく飛び交い……

底どころか浅瀬ですら深い闇色をした海では、今日も漁業組合の

怪人達が水生魔物の皆さんと、どちらがどちらの糧となるか凌ぎを削り……

はたまた、万年不毛な筈の大地では、『地球産』と書かれた肥料が撒かれ、麦わら帽を被った屈強な岩の巨人達によって耕されていたりして……

その有様から、かつては魔界とまで呼ばれていた暗黒真つ盛りな世界は何処へやら、今や位界はすっかり、地球以上にまったりとした世界へと変貌していた。

それもこれも、二百年に起こった『大染争』によって強者の尽くが消え去り、その際に近代化していく地球の影響を受けた結果である。

大地には村が、町が、街が栄え。位界の人々は、秩序と言う安らぎを得ていた。

国など一つとてない。いや、言ってしまうえば、位界そのものが一つの王無き国であった。国が出来れば王が生まれ、王が出来れば世は乱れ、そして、世が乱ればまた……

決して全てがそうでもないが、かつて、嫌と言つほどに力ある者の愚行を受けてきた人々にとって、そんなものはまっぴらごめんだった。

だから、位界には国も、王様もない。いらなかった。

そのおかげか、この百年間。ただの一度も戦争は起こっていない。奪い奪われ、騙し騙される事は相変わらずだったが、殺し、殺され

は随分と減り。人々は、そんな平穩を享受していた。

……そんな、平穩に包まれた位界の果ての片隅の、そのまたすみっこの辺境に　彼は、いた。

そこは、近くに住む人々が『迷わせの森』と畏怖する。不気味に茂った森の先。

そこは、空の覇者達が『帰さずの崖』と嫌悪する。空這う亡者共が蔓延る。断崖絶壁の果て。

誰も訪れない。訪れる事が出来ない。そんな筈の地を舞台とした噂話が、一つ。

『雲より高き場所に建てられた古城には、死せぬ者がいるってさ』

それは、嘘か真か知る術もない。百年ものの、カビ話

……の、筈なのだが、その噂を知る者はみなそれを信じていたのだった　割と真剣に。

だって何故なら、彼は、今日も

重い音が響いてくる。苦しそーで切なそーで、なんだかやるせなさなさに満ちまくった感じのものが、唐突に。

『迷わせの森』の近くにある農村の村人達は、それを聞くと大きな一つ目を弛ませ、朗らかに笑い合った。

「ん、おお？ もうお昼か。ささ、帰るべ帰るべ」
「んだんだ」

帰り際に作物を荒らそうとする怪鳥へと目から光線を出して威嚇しつつ談笑する様は、傍から見ても日常そのもの。不気味な筈の怪音に対する反応としては、少しばかり可笑しなものと言えた。

……だが、彼らからすれば、これもまた、日常の一つであった。

なにせ、音は毎日正午のお昼時に崖の上から降り注いでくるのだ
それも、百年間、ずっと。

音が聞こえてきた当初はみな姿の見えぬ音の正体に怯えていたが、いざ、おっかなびつくり身構えてみても何一つやって来ない。音だけが定期的に、延々とやってくるのみで……

そんなものだから、謎の音は徐々に村人達の当たり前となっていく……今ではこうして、すっかりお昼ご飯の目安代わり。

謎の音を置き去りに、今日も村人達は和やかに家へと一たび帰るのであった。

……では、どうして音は響いて来るのだろうか？

村を過ぎ、森を抜け、崖を越えて、越えて、雲を見下ろせる位の遙か、上。

そこには、石で造られた古城が　ひとつ。

庭は荒れはて、崩れかけた外壁では食肉蔓が力なく項垂れている。その有様を見る限り、誰もが城を無人と思うに違いなかった。

だが、いる。いるのだ。古城には、まだ……『彼』が。

古城の最奥。何人たりとて阻まぬような重厚の扉の先、血色の絨毯の終着点。禍々しき玉座に、『彼』は。

夜の波が如き髪に黄昏の陽の瞳を、深く、映えさせて

『彼』は主、『彼』は王、『彼』こそが不死者。

「……は」

声が、漏れる。ただ一言が、間を暗く染めた。

故に、『魔の頂』

故に、『恐るべき主』

そう、『彼の者』こそ

「……………はらあ……………すいた、のう」

ふにやり……………

玉座からたれ落ちる。『彼』

重い、重い音が
響いた。

第一話 ゴーきのはんらん 前編 (後書き)

サブタイトルの意味は、次回にて……

第一話　ぞーきのはんらん　後編

「ええい、ただか一臓器の分際で余に反逆するとは……」

擦れた声が、部屋に空しく響く。

没落位族『アイリス・ヴァン・ヘンゼルフォン（777歳）』は
今日も今日とて素敵に死にぞこなっていた。

頬はこけ、眼は悲しい程に生気が失せている。真紅の絨毯で倒れ
伏しているその様は、言っては悪いが生き倒れの死体そのものであ
る。

威厳もへつたくれもない。が、それを見て嘲笑う者は、この場に
ただ一人もいなかった。

そう、いないのである。

幾千の魔人を率いたのも今や昔。位界に住んでいる住人の中でも
不死の一席に連なる身でありながら、とある理由により部下も金も
ほとんど全てを失い。ここ百年、したくも無い断食をし続ける有様
な彼であった。

……もつとも、一向に働こうとはしなかったので、まったくの自業自得である。

「おのれえ……不死身ならば腹の一つや二つ、空かぬように出来ておればよいものを……」

なまじ不死身な所為で死ぬに死ねない。そんな極限地獄状態に、アイリスはいい加減、辟易としていた。

（今までどうにかこうにか誤魔化して来たが 限界だ。限界以上の限界！ ……やはり」 『しか無いのか）

一応、空腹を誤魔化すために、アイリスは一日の大半を寝て過ごしているのだが、如何しても昼頃になると胃が文句を言いだすのである。

ある意味、百年もの間報われぬと分かってアイリスへと叫び続ける不屈の胃は、彼に相応しいと言えるのかも知れないが……

「はああううああああああああ！」

何だかもう、色々と限界な彼であった。

奇声をあげて立ち上がるアイリスは、若干ふら付きながらも、叫んだ。

「ベルガモよお！ 来おおおおおいっ！」

正しく必死の叫び声が、部屋のみならず、城中に轟き渡る。

……しばらくの静寂の後。

「はぁぁい、しばしいい、おまちをおお」

かしやり、かしやりと、軽い硬質の何かが擦り合うような音が、部屋へと届いてきた。

音は少しずつ近づいてくる。かしやりしやり、がしやりしやり……

やがて、音が止まる。重厚な扉が少しずつ開き　そうしてそれは、姿を現した。

骨である。それは、問答無用に人骨だった。

「べるがもおお、ここおおにいい」

がしやがしやと音を鳴らしながら、骨　アイリスの元に残った。ただ一人？　の家臣『ベルガモ』は名乗った。

それを見て、玉座に座り直していたアイリスはうむ。と、頷くと。

「……それにしても、毎度々々『ゾンビ』とは思えぬ程の骨つぷりよのう」

「いいんやだなぁあ、どおみてもぞんびじゃぁありませんかぁあ？」

「肉はどうした。肉は……」

呆れ混じりに呟く。 こう見えても、ベルガモは生粋のゾンビである。

昔はそれなりに腐肉が付いたゾンビらしいゾンビであったが、アイリスと過ごした数百年と言う長い歲月の中で、すっかり肉と言う肉が腐り落ちてしまっていたのだった。

主と家臣の間柄ではあるが、掛け合う言葉はお互いに気安い。数百年の主従関係がそうさせていた。

「まあ良い して、ベルガモよ。何千回目の問いかけかは忘れたが……何か、食い物は無いのか？」

もつとも、アイリスもどんな答えが返って来るかは予想している。ただ、最後の最後まで、諦めたくなかっただけだった。

「ああありませえん。なああんにもおお」

現実是非情。予想通りの返答にアイリスは深い々々溜息を吐き、ベルガモへと本題を訪ねた。

「地下の 招喚陣の間の掃除はしておるな」

それに当然と頷くベルガモ。家臣として、何時、如何なる時でも場内の全てを使用出来るようにしておく事は当たり前だからだ。

快活な返答に、アイリスは嫌そうな、本………ツ当に、嫌そうな顔をして、それでも、主の名に恥じない気迫で………告げた。

「余は……働くぞ！」

骨が驚き、悲鳴をあげた。

かるん、かるん。と、明かりは進む。

地下に続く階段を、アイリスとベルガモは暗闇へと沈むかのよう
に下っていた。

「　　うう、ちょおつと驚いただけなのにい、ひどいですよあ」

先頭でランタンを持ったベルガモが悪態を吐く、その後頭部には、ちよつと拳大のヒビが入っていた。アイリスによるものである。

「余に無礼を働いたお主が悪い。それに、ヒビの一つや二つ、今更であろうが」

「そう言う問題じゃあ　　はああ、もういいですうう……」

反論を止める。どう言った所でこの横暴な主は聞く耳を持たない事を、ベルガモは嫌と言うほど思い知っていたし　　それに。

「着きましたああ」

「うむ」

もう、目的地には着いたのだから……

「……開けよ」

眼前に現れた古い木製の扉を、ベルガモは見た目に反した力強さで押し開いた。

そこも、変わらず暗闇だった。違うのはそこが開けている点で、少なくとも明かりが空間を満たさない位には広々としている。

と。

「灯れ」

アイリスの声が、静かに暗闇へと浸透していった。

ぼう、ぼう、ぼう。と、波打つ音に合わせるかのようにして白い炎が現れ、漆黒を取り除いていく。

明かりに照らされ、空間は忽ち一つの部屋へと姿を変えていった。

そこは、一面を残し石造りで出来ているため何処か寒々しい。そんな、冷たさを感じる部屋だった。

「……異常は、無いようだのう」

残りの一面 床を一通り見て、ほんの少し安堵するかのように呟くアイリスに、ベルガモは当然だと言わんばかりにアバラを張って頷いた。

床は、透明だった。透けて見える床の下は、それなりの広さを持つ地下室を照らしている白光でさえ通らない。底なしの、闇。奈落だった。

それだけでは無い。そして、それこそが地下へとアイリスが訪れた理由であった。

床の中心を大きく支配する文様。それは『ひび割れたステンドグラス』のようで

これこそが招喚陣。アイリスが地球へと訪れるための、彼専用の

陣。

招喚と名付けられてはいるものの、彼程の強大な力の前には招喚者など不要である。そのため、並の位人達があちらから呼ばれぬ限り、地球へと行く事が出来ないのに比べ、アイリスは自身が望みさえすれば何時でも世界を渡っていく事が出来るのである。

「……何故、それをしなかったと言えば。その、まあ、働きたくなかったの一言だったりする。とても情けない。」

とはいえ、それも最早過去の夢。絶え間なく腹部へと訪れる切なさ、今の彼を否応なく駆り立てていた。

「さて……」

アイリスが招喚陣の中心に立つ。すると、まるで陣が息を吹き返すかのように光を発し始めた。

「では、ベルガモよ。留守を頼む。とは言っても一仕事終わり次第帰ってくる故、大して掛らぬとは思うが……」

「『ひとしごと』……ですねえ。りようかいでええす」

「……ふん」

何かしら、含みを持たせるかのように頷くベルガモに鼻息で返答し、アイリスは眼を閉じた。そして。

静かな、声が、風が、光が、部屋を、彼を　染めた。

乱雑で、整然で、厳かで、陽気で、夜で、朝で、なんにだってと
れて……そんな、約束の言葉が、小さな、世界、を　　？

ぽすんっ
……

(……ぽすん？)

眼を開く。すると、そこは先程何一つ変わらない部屋と骨が見え
るばかりで……

『……………』

眼が合わさる。何処となく気まずさをお互いが感じた頃。間の抜けたアナウンスと共に、妙にはきはきとした声が、部屋を包んだ。

『お客様の招喚陣は、現在使われておりません。新規の御契約の際には、最寄りの町の招喚センターまでお越し下さい。尚……』

声は続く。けれど、今のアイリスには届いてなくて

「お……」

「お？」

「おの
れええええええええええつ！！」

何だか色々、叫ばずにはいられないアイリスであった。

……ちなみに。

もし、もしもの話ではあるが、彼がこのまま地球へと訪れていれ
ば。一仕事 『力での略奪』が行われていれ

世界は、滅びていただろう。

…… 全ては過去の、黙示録。

これから紡ぐは、ちいさな。ちいさな

幸せの

物語。

第一話 ゴーきのはんらん 後編（後書き）

次話から、色々動き回り始めると思います。

大まかなプロットは書きあげていますが、何分作者は書くスピード自体が遅いため、これから半月か一月ごとの更新になるかと思われます。申し訳ございませんが、ご了承頂ければ幸いです。

……それでは、暫しの御つきあい。宜しくお願い致しますm（
—）m

第二話 にーとのしゅらい 前編 (前書き)

大変お待たせしました。

次回は、もう少し早く上げたいです……

第二話 にーとのしゅらい 前編

夜の波が如き外套が、同色の髪と共にたたく……

アイリスとベルガモの二人は古城の外、帰さずの崖の直ぐ側にいた。

眼下には雲海が何処までも広く漂っている。所々雲が薄れている箇所からは、大陸の欠片を眺める事が出来た。

「まったく、何故に余がこのような面倒事を……」

ぶつくさと愚痴を呟くアイリスは、地下室での腹立たしい出来事を思い出し、非常に苦い顔になっていた。

……あの叫びの後。懲りずに何度も招喚を試したアイリスであったが、どれ程試そうと結局最後には無慈悲なアナウンスしか流れて来ず。かと言って、腹いせに町を襲おうにも、今のうちに体調が最悪の状態では非力なニンゲンなどが蔓延る地球は兎も角として、それなりの強者がごろごろという位界では返り討ちに合うのは確定的であり……

そのため、今は大人しくするべきだと言うベルガモの意見を受け入れ、とうとう観念した彼はアナウンスに従い町の招喚センターへと赴く事にしたのだった。

「まああま、いつまでもぶんすかしてないでええ、ささあつと行きましようよおお」

「戯け！　ぶんすかなどしとらんわ！」

そう、今一説得力の無い否定をするアイリスの足取りは、先程までの瀕死っぷりからすれば随分しゃんと、している。

……その理由は、その　古城の外壁が、幾分『さっぱり』としている事からご想像して頂ければ、幸いである。

「では、行くとするか」

「『全力』ですかああ？」

「……大した距離も無いのにいちいち『力』なぞ使ってられるかこれで行く、これで」

そう言いながら外套を軽く持ち、ぽんぽんと、叩く。

ベルガモもそれで得心が行ったのか、それ以上は何も言わなくなつた。

それに対しアイリスは軽いため息を吐くと、今度こそはと背筋を正し　雲の群れへと、足から飛び込んだ。

暫しの間、雲になったような気分を味わった後……アイリスの眼に、久方ぶりの世界が映り始めた。

宙を舞う風が容赦なく彼を叩く。長髪と外套が互いに重なり、まるで、行き遅れた影のように大きくうねっている。その感触に、アイリスは心地良さを感じていた。

（久しいのう……まあ、このような外出もたまには悪くない、か）

……何だかんだで、百年ぶりの空中散歩を楽しんでいたアイリスであった。

とはいえ、今は絶賛落下中であり、だと言うのに、彼は呑気に足を揃え、あまつさえ、両腕を組んでいたりしている。このままでは位界の小さなシミになってしまふ事は想像に難くない……

が、それは要らぬ杞憂であったようで。

「ほれっと」

掛け声一つ。それ自体に意味は無く。されど、その一言で、落下は容易く止まった。

アイリスの背後、はためていた筈の外套が、それこそまるで影のように広がっていた。

羽だった。大柄なアイリスにも見劣りしない、巨大な闇夜を切り裂く蝙蝠こうもりが如き羽が、彼を空にとどめていた。

両羽がひとたび宙を打つ。唯それだけで、アイリスの身体は空を勢い良く滑り始めた。

（うむ　良き哉、良き哉）

これまた久しぶりの心地よい感覚に、彼は内心満足の声をあげる。誰にも聞こえぬその声色は、何処か幼子のようなものである。

何せ、何もかもが百年ぶりなのだ。自業自得とはいえ、そのどれもが懐かしく、また、新鮮だった。

特に

（のどかよのう……）

アイリスの足元に広がる位界の大地は、百年以上前の位界を知る
彼からすれば、異常にも思えた。

耳を傾けども悲鳴無く。眼を凝らせども戦火無く。

薫る風も、以前の荒々しさは何処かへと、今や柔らかな穏やかさ
さえ、感じられて……

「 まったく、軟弱になったものよ」

そう、一人ごちたアイリスの眼は、それを嘆けば良いのか 或
いは、他に何を抱けば良いのか……少しだけ、複雑な色をしていた。

（この調子では、あの辺鄙な町も如何なっておるやら……やれやれ）

これから向かう最寄りの町に、そんな一抹の不安を抱いたアイリ
スであった。

それでも黒羽は前へ前へ。

位界の果ての片隅の、そのまたすみっこの田舎町 『シトリリス』へと……

『シトリリス』果ての町。

古びた町、寂れた町。

町とは名付けられてはいたものの、大陸中央からは掛け離れ、されど、人を引き付ける程の魅力無く……

そのため、嘗てのシトリリスは『村の町』とすら揶揄されていた。

「 筈、だったのだが…… んうむ」

感嘆半分、呆れ半分。そんなため息を洩らしながら、アイリスは百年ぶりのシトリリスを見渡していた。

背高く、広がった町並み。立派に舗装された道路。そして、行きかう人々の奇抜な装いたるや……

それは正しく、百年がもたらした発展の姿だった。

（いやはや何とも奇妙であるの　おお、あれは何だ！　ふむ。ふむ……ほおう……）

そんな町の日常を、アイリスは珍妙なものを見るかのようにそして、ちよっぴり眼を輝かせながら眺めていた。

……ちなみに、そんなアイリスもまた、町の人々から物珍しげに見られていた。外套を纏った流行遅れをぶっちぎりで通り越した派手な出で立ち、非常に目立っていたからである。

とは言え、彼に対する周囲の反応は温かいものだ。何故なら

「ねえママあ、いぞくさま、いぞくさまがいるよ!」

「あら本当……マー君は位族様のお話が大好きだもんね?」

「うん!　だいすき!」

アイリスの服装が、あまりにも古すぎたのである。

『位族』力強き者、世界に選ばれ染まりし者……

彼らは依然、この位界に在り続けている。

……だが、近代化の波を受け百年前とは大きく変化した位界において、力だけが優れていた位族の権力はかつてよりも遙かに弱まっております（もっとも、驚異としての権威は未だに健在であるが）まし

て、位人の寿命はニンゲンと同じで、およそ百年に届くか如何かといったもの……位族の暴威を知る人々もいなくなり、今や、一般の位人達と位族の垣根は随分と低くなっていた。

そのため、今の位族は、最早位族とは呼ばれてなどおらず、その呼び名は『昔話や童話』の中でのみ、使われていた。

無論、アイリスの様な位族然とした姿をした者などいる筈も無く……町の人々は、アイリスを『仮装好きな変った人』程度にしか思っていなかった。

そんな風に思われているとは露ほども知れず。

（ほほ！　すごいのう、ほそいのう、たかいのう！！）

目一杯、今の世を満喫しているアイリスであった。

とまれ、アイリスと町との百年ぶりの再開は……そんな感じだった。

果たして、彼は招喚センターに辿りつけるのか。そもそも彼は、町に來た目的を覚えているのか！

……覚えてると
良いなあ。

第二話 にーとのしゅらい 前編 (後書き)

何処で各話毎の話を切れば良いか 難しいです(汗)
不自然な所など御座いましたら、ご指摘下さい。

次話は、七月中にあげれたらと思っておりますm()
m() m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3041m/>

しょ～かん！ おと～さん！？

2010年10月14日14時52分発行